

パネル

ちの殉教との相違を峻別する新渡戸の論理を読みとることができようし、またそれゆえ海老沢氏らの見解というのは、彼の主張を的確に捉えたものではないと評せざるをえないのである。

新渡戸が言う武士道、換言すれば、近世以来の伝統思想として位置づけられた武士の道徳というものは、むしろ武士に求められていた徳目を、武士を越え、平民や商人へも拡げ、適合させる「平民道」へ向かうことを企図するものであったはずである。このことに留意するならば、平民道の構想というのは、いわば伝統思想としての武士道を止揚することであつたと考えられるし、彼が武士道を「旧約」として捉え、キリスト教との出会いを契機に、新たな倫理、道徳へと進化を遂げねばならぬとの論を展開したところにこそ、キリシタン信仰の深化や殉教の背景があると考えるべきなのである。

韓国の伝統思想とキリスト教

方 俊 植

二〇〇五年度に行われた韓国の「人口総調査統計」によると、およそ人口の二五％の人たちが、自らをキリスト教徒であると明確に表明している。韓国においてこれほどまでにキリスト教徒が増加した理由としては、韓国のキリスト教がナショナリズムと接合したからだとの見方が一般的である。またこのことは、韓国ではキリスト教が帝国主義や植民地主義としてで

はなく、当時の人々によって「積極的に受け容れられた」ことを意味するものだと指摘もある。では、こうした背景なのか、韓国の伝統思想とキリスト教との相関関係は如何なるものであつたのか。

まず、朝鮮王朝時代（一三九二—一九一〇）、仏教の衰退とともに新たな政治理念として登場した儒教は、十七世紀に入ると、現実とは乖離した国家理念として国家の機能を弱体化させ、社会全体を混沌へと陥らせることとなつた。その結果、一部の「両班」—朝鮮の支配層—から、「現実の改革をもちたらずべく新たな理念」を求める動きがうまれた。つまり、朝鮮へのキリスト教（カトリック）の流入というのは、当初、海外の宣教師によつてではなく、現実の改革を求める両班層によつてなされたのである。こうした動きのなかで特に注目すべきは、カトリック教会の設立に先駆的な役割を果たした李檠（一七五四—一七八六）という人物である。李檠は儒教の知識を用いて支配層のための『聖教要旨』を著した。全体が四十九章から成るその内容を確認してみると、まず一章から十五章までのところでは聖書の内容が説かれ、次の十六章から三十七章で儒教經典の知識について説明されている。そして三十一章から四十九章では、自然を通して「ハナニム」（＝創造主・神）の属性と業績とを称え、懺悔と救済の道を提示し、理想的なハナニムの国が古代東洋の聖人や聖君の治世のようなものであつたことが論じられている。では、李檠は『聖教要旨』において、儒教思想と聖書とを、どのように結びつけているのであろうか。以下は『聖教要旨』（一章）の一部である。

未生民来（人が生まれる前に）

前有上帝（すでに、上帝がいるのに）

惟一眞神（唯一の眞なる神として）

無聖能比（聖なるもの、その能力を比較するところがない）

李榮が儒教の枠組のなかで儒教の言葉を用いてキリスト教を捉えたことは、東洋思想の伝統的な遺産を再発見すると同時に、新たな神学の方向性を明らかにするものでもあった。そして何より、当時の儒学者たちがキリスト教を理解する際、朝鮮における伝統的な儒教思想を大いに役立てたことが『聖教要旨』から窺えるのである。

朝鮮の人々が、プロテスタントを受容したのは一八八〇年以後である。韓国で行われたプロテスタントの宣教は、単に教会の拡大運動にとどまらず、初めから民衆の啓蒙と生活の改革を目指す文化的運動としての性格が強かった。なかでも、とりわけ婦女子や一般大衆を中心に勢力を上げたのである。なお、その際注目すべきはプロテスタントが、「ハングルの宗教」であったということである。こうしてハングルの宗教、民族の心性を代弁する宗教としてのプロテスタントは、朝鮮半島にかけて復興会（ブフンフェ）をおこなうことにより、民衆の宗教、あるいは民族の宗教として位置づけられていくこととなった。以上、本発表では韓国におけるキリスト教受容の問題を、伝統思想との連関から概観することにより、朝鮮の時代から今日に至るまで、韓国ではキリスト教が時代的な要請にしたがい、積極的・能動的に受容されてきたことを明らかにした。

内村鑑三の武士道

岩野 祐介

本パネルのテーマである、「キリスト教受容の土台としての武士道」という見方を定着させる上で大きな役割をはたした人物の一人が、無教会主義キリスト教の創始者、内村鑑三である。彼は、武士道を台木とし、キリスト教を接ぎ木する、という表現をした。いわば新約に対する旧約としての武士道である。しかし、内村が用いる武士道という表現には、かなりの幅がある。

内村は事実として武士階級出身なのであるから、彼が「自分たちは武士である、武士的である」ということに間違いはない。しかし、武士道的であることと、武士そのものであることとは違う。内村が言う武士的ということ、封建的（＝特権的）階級意識とは異なるのである。

そこで、本発表では内村鑑三はどのように武士や武士道に言及しているか、ということを確認していく。それがいかにしてキリスト教の台木足り得ると内村が考えていたか、ということを明らかにすれば、それが武士道的キリスト教の問題として指摘される排外的ナショナリズムと自動的・必然的に結合するようなものであるかどうか、も明らかになるであろう。

内村が武士・武士道について言及した箇所を分析すると、主として「何々のでなく武士的」、というパターンで武士・武士